

床

寺田寅彦

青空文庫

またひとしきり強いのが西の方から鳴つて来て、黒く枯れた紅葉を机の前のガラス障子になぐり付けて裏の藪を押し倒すようにして過ぎ去った。草も木も軒も障子も心から寒そうな身慄みぶるいをした。ちようど哀れをしらぬ征服者が蹄ひづめのあとに残して行く戦者の最後の息であるかのような悲しい音を立てている。これを嘲る悪魔の声も聞えるような気がする。何処の深山から出て何処の幽谷に消え去るとも知れぬこの破壊の神は、あたかもその主宰者たる「時」の仕事をもどかしがっているかのように、あらゆるものを乾枯させ粉碎せんとあせっている。

火鉢には一塊の炭が燃え尽して、柔らかい白い灰は上の藁わら灰ばいの圧力にたえかねて音もせずゆくに落ち込んでしまった。この時再び家を動かして過ぎ去る風を行えをガラス越しに見送った時、何処とも知れず吹入った冷たい空氣が膝頭から胸に浸み通るを覺えた。この時われは裏道を西向いてヨボヨボと行く一人の老翁を認めた。乞食であらう。その人の多様な過去の生活を現わすかのような継ぎはぎの檻ぼろ樓は枯木のような臂ひじを包みかねている。わが家の裏まで来て立止った。そして杖にすがったまま辛うじてかがんだ猫背を延ばして前面に何物をか求むるように顔を上げた。窪んだ眼にまさに没せんとする日が落ちて、頬冠

りした手拭の破れから出た一束の白髪が風こがらしに逆立さかだつて見える。再びヨボヨボと歩き出すと、ひとしきりの風が驀まつ地しぐらに道の砂を捲まいて老翁を包んだ時余よは深き深き空想を呼よ起よこした。しかししてこの哀れなる垂死の人の生涯を夢みた時、あたかもこの人の今の境遇が余の未来を現あらわわしていて、余自身がこの翁の前身であるような感じがした。

彼は必ず希望を抱いて生れ、希望の力によつて生きて来たであろう。否いな今いまもなおこの風に吹き散る雲の影のようななんらかの希望の影を追うてゐるではあるまいか。そしてこの果敢はかない影を捕えんとしては幾度か墓はかのしきに躓つまずいてゐるのではあるまいか。凡およそ何がはないと云つても、浮世の人の胸の奥底に潜んだまま長い長い年月を重ねて終ついにその人の冷たい亡骸なきがらと共に葬られてしまつて、かつて光にふれずに消えてしまふ希望程はかないものがあるうか。

浮世の人はいかなる眼で彼を見るであろうか。各自の望みを追うに暇いとまのない世人は、たまに彼の萎しなびた掌てのひらに一片の銅貨を落す人はあつても、おそらくはそれはただ自分の心の中の慈善箱に投げ入れるに過ぎぬであろう。そして今特別の同情を以て見てゐる余にさえも、この何処の何人とも知れぬ人の記憶が長く止まつていようとも思われぬ。

彼はたぶん恋した事もあるう。そして過ぎ去つた青春の夢は今幾いくばく何の温まりを霜夜しもよの

石の床にかすであろうか。

彼はたぶん志を立てた事であろう。そして今幾何^{いくばく}の効果を墓の下に齎^{もたら}そうとしているのであろう。

このような取り止めのない妄想に耽^{たふ}っている間に、老人の淋しい影は何処ともなく消え去った。突然向うの曲り角から愉快な子供の笑い声が起って周囲の肅^{しゆくさつ}殺^{ころ}を破った。あたかも老翁の過去の歓喜の声が、ここに一時反響しているかのごとく。

（明治三十四年十二月）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

※底本編集時に、亀甲括弧付きで以下の箇所に加えられた注は、削除しました。

「希望の影を追っている「の」ではあるまいか。」

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>